

8月総評

西躰 かずよし

今月は夏休みだったからだろうか、投稿数も多く、惹かれる作品が多くあった。投稿者の作品の水準は年々あがってきているように思う。また、新たな書き手も育っている。

ばいばいの手から秋雨前線です

音無 早矢 埼玉県

秋雨前線は秋の空気と夏の空気の境目にできるものらしい。雨は涙を連想させるが、明るい口調のなかにも別れのかなしみが見え隠れする。

街中にガラス器の増え夏衣

桜望子 山形県

情景と季節とを捉えた涼やかな作品だと思う。浴衣姿で歩いている人たちの姿が目につかぶようである。

栓抜き音だけがする夏季休暇

合川秋穂 東京都

飲んでいるのがビールだとすると、『栓抜き音だけ』の『だけ』は、自身を自嘲する言葉なのかもしれない。客観的な情景描写が、作品をユーモアのあるものになっている。

恐竜が減んだ理由を話し合う

伸びすぎたカップラーメン啜って

小島 涼我 東京都

この作者の書く作品は、B級グルメのような印象があって、その方法は口語に合う。伸び

すぎたカップラーメンを啜りながら、とりとめのない話をする情景に惹かれる。高級料理だけが料理ではない。B級グルメにはB級グルメの自恃があってもいい。

白亜紀もさいしょの九十分次第

松下 誠一 東京都

さいしょの90分というのは、それほど大切なんだろうか。白亜紀ですら、さいしょの90分次第なんだとすると、僕たちのちっぽけな人生なら、なおさらそうかもしれない。そう考えると、なんだかよくわからなくなってしまうけれども、とても気になる作品。

原っぱを走る端から八月さ

中矢 温 愛媛県

「は」の韻が心地いい。走ったところから八月になる気がして楽しい。

消しゴムで消せる程度の雪が降る

山本先生 東京都

雪というのは書き手にとって消しゴムで消せるようなものではなかったはずである。だから消えてしまうような雪がそこに降ったことが、どうしようもなく悲しいのだと思う。

しろいものばかり

洗濯かごに入れて

ひろくなる部屋

こはくいろ 大阪府

しろいものばかりを洗濯かごに入れて、部屋を広くするというというのは、大切なものをひとつひとつ忘れることで、生きていく場所をつくるのとどこか似ている。

小鳥くる

ハンバーガーショップのあかり

有野 水都 東京都

夜のハンバーガーショップは街の休憩所かもしれない。小鳥がきて、ハンバーガーショップのあかりを見て、という登場人物の視点。小鳥とハンバーガーショップの明りとの組み合わせがおもしろい。

試験中の青空はあおくてとおい

うたた 岡山県

試験中に空を見るのだから、試験はあまり出来なかったのだろう。『青』と『あお』が重なるが、『あおくてとおい』というのは、登場人物の心情を投影したものだろう。

この作者の他の作品に『運ばれるシオカラトンボ吊り革に／つかまる足はちゃんと六本』というのがあるが、書き手のやさしさが伝わるいい作品だと思う。

ガラス片 街灯のもと星になり

花野 木春 東京都

星になるというのは死に対する鎮魂を想起させる。街灯のした、砕け散ったガラス片を星とうたったのは、それを自身と重ね合わせていたからかもしれない。

電気屋の冷蔵庫には

弟が入っていて

閉めたらいなくなる

井口 可奈 東京都

弟はもうこの世にはいないのかもしれない。だから登場人物は弟を冷蔵庫に入れる。閉めればいなくなるとしても、それでも冷蔵庫を開けている間だけは、弟はそこに存在している。

「桜桃」の
出だしが好きと母が言う

柘植 雅一 愛知県

この小さな作品だけで、母親に対する愛情が伝わってくる。そして母をよく見ていたであろうことも。

あなたが嫌う花びらだし、
ふりかけだし、私だし

雲理そら 大阪府

きっと私は、あなたに嫌われたくないに違いない。でも私は、ふりかけや嫌う花びらのように、とるにたらないものと私を比べてしまう。あまりにも不釣り合いな、花びらや、ふりかけは、あなたへの混乱だから、恋といってもいいのかもしれない。

高校を卒業しても
ファミレスで五時間話す
人といたいよ

中原紘 山口県

大人になれば、友人と語り合うこと自体が少なくなるということを、書き手は直感的に分かっているのだろう。だからこそ、そうした人を希求するのだろう。

あいされる

ために
産まれてきたような
にゆうどうぐも を握りつぶして

さいう 愛知県

愛されることはいいこと、という一般的な感情を抱いていたら作品に殴打されるだろう。その中心にあるのは、そうした生ぬるいものや、そこに含まれる欺瞞への、反旗であり、きっぱりとした拒絶である。

潔癖であることは日常では否定的にとらえられることもあるけれども、それも悪い事ではないと作品はおしえてくれる。

燃えさしが胎児に見えた

小沢旭 山梨県

作品からは死んだ胎児が連想される。登場人物は、永遠に許されない罪を抱えているかのようにもみえる。

海色のこんぺいとうを子にもらう

長谷川柊香 宮城県

『こんぺいとう』はどこか懐かしい。だから『海色のこんぺいとう』は、自身の帰るべきところから届けられたもののようにも感じられる。自身のいない未来を生きるであろう子から、それをもらうことは、いのちのリレーなのかもしれない。